様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年３月３１日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20720132
研究課題名（和文）
日英語の周辺的現象における形と意味のインターフェイスに関する研究

研究課題名（英文）
On the syntax/semantics interface in peripheral phenomena in English and Japanese

研究代表者
今野　弘章（KONNO HIROAKI）
高崎健康福祉大学・薬学部・講師
研究者番号：80433639

研究成果の概要（和文）：本研究課題では，研究代表者が博士論文（Konno (2005)）で提案した「ある文法形式が当該言語の通常の文法的慣習からみて有標な場合，その形式の機能は，対応する無標形式に比べ，特化している。」という一般化（以下，「形式の有標性と機能の特化に関する一般化」と略記）の妥当性を，英語の中間構文と日本語のイ落ち構文の分析を通じて示した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to verify the validity of the generalization about the correlation between formal markedness and functional specialization (abbreviated as “FMFS”) proposed by Konno (2005): If a grammatical form is marked with reference to the grammatical convention of a given language, then the function of that form is more specialized than that of the corresponding unmarked form(s). Investigating the English middle construction and the Japanese adjectival conjugational ending drop construction, the study showed that the two constructions give further credence to the FMFS.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	300,000	90,000	390,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
総　計	600,000	180,000	780,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：インターフェイス，周辺的現象，有標性

１．研究開始当初の背景

近年，個別言語の文法からみて周辺的と考

えられる現象も言語学の重要な研究対象であるということが，Fillmore et al. (1988) や Culicover and Jackendoff (1998)をはじめとする研究で盛んに主張されている。これは，主に，認知言語学的アプローチで主張される研究戦略であり，現象を核と周辺に区別し，前者に研究の焦点を絞ってきた Chomsky (1981)を代表とする生成文法的アプローチとは対照をなす。

２．研究の目的

本研究は，１で述べた認知言語学的方法論を踏まえながらも，先行研究とはまた別の観点から周辺的文法現象の重要性を示すことを目標とした。具体的には，言語学の分野でこれまでほとんど，あるいは全く扱われてこなかった日英語の周辺的（有標）現象を，それぞれの言語における中核的（無標）現象と比較しながら詳細に記述し，研究代表者の博士論文（Konno (2005)）で提案した，以下のの語用論的一般化の妥当性をさらに検証することを目標とした。

「形式の有標性と機能の特化に関する一般化」
ある文法形式が当該言語の通常の文法的慣習からみて有標な場合，その形式の機能は，対応する無標形式に比べ，特化している。

３．研究の方法

日英語の周辺的現象における形と意味の相関関係を，先行研究・母語話者の内省・インターネット上の用例を用いて考察し，それぞれの現象が形式の有標性と機能の特化に関する一般化を支持するか否かを検証した。

４．研究成果

（１）平成 20 年度は，機能の特化を示す構文の一例として，英語の中間構文（ex. Bureaucrats bribe easily.）に関する研究を行った。

中間構文は，主語の恒常的な特性を表す総称的な構文であり，特定の出来事を表さないといわれている。だがその一方，中間構文が特定の出来事を表す場合があるという指摘もある。これらの観察から，中間構文は，「総称タイプ」と「出来事タイプ」に分類でき，「総称性」の観点からは意味的自然類を成さないことが分かる。当該年度の研究では，上述の一見矛盾するように思われる事実を統一的に捉える方法を考察した。具体的には，Kuroda (1972)に倣い，categorical judgment と thetic judgment の区分を応用し，中間構文を categorical 文と見なすことを提案した。そして，この提案が，総称タイプと出来事タイプの中間構文を意味的自然類として捉えられること，さらに，当該構文が示すいくつかの生産的・非生産的側面を原理的に説明できることを示した。この研究成果は，日本英語学会第 26 回大会(2008 年 11 月，筑波大学)で口頭発表し，さらに『JELS 26』(2009 年 3 月，日本英語学会）で論文として発表した。

上述の成果は，以下の二つの意味合いを持つ。①一見多様に映る中間構文が，従来とは異なる角度から眺めると，機能の特化を示し，意味的自然類として振る舞う。これは，構文のサブタイプを複数認め，サブタイプ間に共通する特質を必ずしも求めない「家族的類似性」に基づくカテゴリー観との対比で興味深い帰結である。②現時点では未解決であるが，中間構文が英語の文法体系において形式的に有標（破格）であるということが示せた場合，当該構文は，形式の有標性と機能の特化の関連を主張する本研究の立場を支持する現象となる可能性がある。

（２）平成 21 年度は，現代日本語におけるイ落ち構文についての研究を進めた。

イ落ち構文とは，「ださっ。」や「気持ち悪

っ。」のような，形容詞の終止形活用語尾「い」が脱落し，形容詞語幹に促音が直接付加された口語表現のことを指す。イ落ち構文の統語的・意味的特徴を分析した結果，当該構文が以下の特徴を持つことが明らかとなった。(i) イ落ち構文は，統語的には，C，T，Neg の機能範疇を欠き，小節（small clause）が主節を形成する“root small clause”（Progovac (2006)）の一種である。(ii) また，意味的には，イ落ち構文は，発話時における話者の感覚や判断を，「伝達」ではなく，「表出」する「私的表現行為」(Hirose (1995)，廣瀬（1997)）専用の構文である。(i)と(ii)の記述を踏まえ，本研究課題のテーマである「周辺的現象における形と意味のインターフェイス」の観点からイ落ち構文の統語的特徴と意味的特徴を照らし合わせた結果，当該構文において，「動機付け」・「有標性」・「類像性」の観点から，形と意味の間に一般的かつ規則的な対応関係があることが明らかとなった。

本研究課題が提案する「形式の有標性と機能の特化に関する一般化」の背後にある観点は，一見異常で不規則と思われる周辺的現象の背後に，実は正常で規則的な形と意味の対応関係が潜んでいる場合があるというものである。この点で，イ落ち構文は本研究の基本的立場を大いに支持する現象だといえる。

現在，当該年度の研究成果を論文（今野弘章（2010)「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」未発表原稿，高崎健康福祉大学.）にまとめ，その論文に対し，知人の研究者にコメントを求めている段階である。今後はコメントを参考に原稿に手直しを加え，次年度早々に学会誌に論文を投稿予定である。

（３）今後の課題として，以下の３つを挙げることができる。

①英語の中間構文が，現代英語の文法体系において形式的に有標か無標かを検証すること。（１）で述べた研究成果では，中間構文が機能の特化を見せることを論証しているだけであり，当該構文が形式的に有標か否かまでは明らかにできていない。２でも述べたように，本研究課題の目的は形式の有標性と機能の特化の相関を検証することにあるため，①は本研究にとって重要な課題である。

②イ落ち構文の研究で明らかになった形と意味のインターフェイスの一般性を検証すること。（２）の研究で明らかにした，イ落ち構文における形と意味の各対応関係が，イ落ち構文独自のものなのか，それともより広範の現象に成立するものなのかをさらに検証することで，イ落ち構文がどのような意味で「周辺的」現象なのかをより説得的に示すことができるようになると思われる。また，この課題について考察することで，周辺的現象の「周辺性」が，問題の現象が他の現象には見られない独自の特徴を備えているという意味なのか，問題の現象が持つ個々の特徴自体は一般的であっても，その組み合わせが他には見られないという意味なのかという一般的問題についての理解も深めることができると思われる。

③イ落ち構文の獲得についての研究。生成統語論の分野では，子供の言語獲得は，機能範疇を欠いた状態から当該の範疇を含む状態へ移行すると考えられている（Radford (1990)）。この仮定が正しいとすると，機能範疇を欠くイ落ち構文は，言語獲得が完了する前の「未熟」な統語構造を備えていることになる。では，機能範疇を欠いた統語構造を多用する時期の子供の言語にイ落ち構文に相当する現象は観察されるのか，もし観察されなかった場合，それはなぜなのか。イ落ち構文の獲得についての研究は，上記の一般的

言語獲得モデルの妥当性を検証する一つの手段となると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①今野弘章,「中間構文の『総称性』再考」『日本英語学会第 26 回大会研究発表論文集（*JELS* 26）』査読無，2009，pp.121-130.

〔学会発表〕（計１件）

①今野弘章,「中間構文の『総称性』再考」日本英語学会第 26 回大会，2008 年 11 月 15 日，筑波大学.

〔その他〕

ホームページ等

http://konnohiroaki.gozaru.jp/

６．研究組織

(1)研究代表者

今野　弘章（KONNO HIROAKI）

高崎健康福祉大学・薬学部・講師

研究者番号：80433639

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし